

# 商いの新しいものさし

(株)商い創造研究所  
代表取締役

## 松本 大地

第138回

### 古くて新しい沼垂テラス商店街

「居心地の良い場所へ」と、おのずと女性を訪れる」と思わせたのは、新沼垂から徒歩約20分の「沼垂(ぬつたり)テラス商店街」だった。かつて沼垂市場通りと呼ばれ、昭和の時代には新鮮な野菜や日用品が並ぶ生活の場として賑わったが、近年はシャッターを下ろしたまま店主の高齢化、店舗の老朽化が進んだ。2010年に空き店舗に惣菜とアイスクリームの店がオープン後、昭和レトロな長屋に似合う家具店、カフェ、陶芸店が続

いて開業した。14年には沼垂地域全体の活性化を見据えた(株)テラスオフィスが設立され、商店街を形成する長屋を購入して再生プロジェクトがスタート、15年には一つひとつの小商いが集まった28店の「沼垂テラス商店街」が開業した。

若い店主達が今あるモノやコトを磨き上げ、編集した個性が光る個店は、ほかでは味わえない体験価値があり、買う目的がなくてもなぜか手が伸びてしまう。陶器工房「青人窯」ではデザインがユニークなお皿に出会い購入した。花屋「ライオン堂」では玄関に飾るプリザーブドフラワーを、セレクト雑貨の「ひとつぼし雑貨店」では本を購入。小休止に若い夫婦のお店「紡ぐ珈琲と。」に入り、主人のハンドドリップコーヒーと奥様の手作りスコーンを味わう。あまりのスコーン的美味しきにお土産用にも購入した。話しかけると「店舗改装に予想外の費用がかかったが、空間も含めお客様に寛いでもらえている」と語ってくれ



リンベーションで蘇生した沼垂テラス商店街

た。周りのお店も店主達と同じような世代が訪れ、双方で共感している様子がうかがえた。商店街に遊休地がで、駐車場になつていくだけでさみしいと誰もが感じるだろう。地方を訪れる楽しみの一つは、その土地の生活に触れる商店街を歩くこと。使い道がなく、ただ駐車場に

なっていると街に界隈性が無くなり、人は街から離れ、荒廃する悪循環から抜け出せなくなる。沼垂テラス商店街のように、背伸びせず、身の丈に合った日々の生活をゆったり楽しめる、五感が満たされる居場所になる。大きさを安さや外見がすべてではなく、自分らしく美しい生活を過ごすヒントを与えてくれる店には大きな価値があると強く感じた。楽しく交わる

「まちの縁側」というコンセプトをつくれれば、商店街はただモノを買っただけでなく、街を歩き、人と出会い、お茶を飲み、街の生活文化に触れる楽しみや発見をもたらす好循環を生む。振り返れば、商店街は個人店舗の集まりでできている。個店にはそれぞれの個性があり、別々の性格を持ち、それぞれの顧客がいる。個性的な地域の暮らしを提供できるよう商店街を活性化すれば、訪れた人が街の魅力を感じ、暮らしがりに触れる。そうした場に、人が集まり、街が活性化していくのが令和時代での商店街の方向軸ではないだろうか。

従来は商店街と違う発想で考えると、人と人、人とモノ、人と情報をつなげて活力を生み出す「コミュニティ型商店街」、日常と観光の重なる楽しさの祝祭空間の「新観光商業商店街」、多くの参拝者が訪れる寺社仏閣で地域の生産者やメーカーと組み、食文化や伝承されるものづくりの新たな提案をする「参道商店街」など、多くの地方創生の可能性が考えられよう。人々の生活や地域社会に根差した本質的なものを見いだし、そこから新たな価値をつくるには、沼垂テラス商店街のように時代を担う若者が活躍できるステージづくりを促進することが肝要だ。

大量生産、大量消費、大量廃棄の発想を問い直し、器の大きさから器の中身を問う時代になった。市場が成熟しきった日本では消費者の価値観が多様化し、画一的で硬直した業態では新鮮さも伸び代もない。沼垂テラス商店街には、ふるきをたずねて新しく創る温故創新の姿が見えた。